

浄

monthly
JODO
1997.6

土



1997
6
June



テレコムしよう。



コミュニケーションの未来へ
日本テレコム

お申し込み、お問い合わせはお客様センターへどうぞ。

☎ 0088-82 (無料) または 0120-0088-82 (無料) [受付時間] 9:00~23:00 (年中無休) [インターネットホームページ] <http://www.japan-telecom.co.jp/service/>

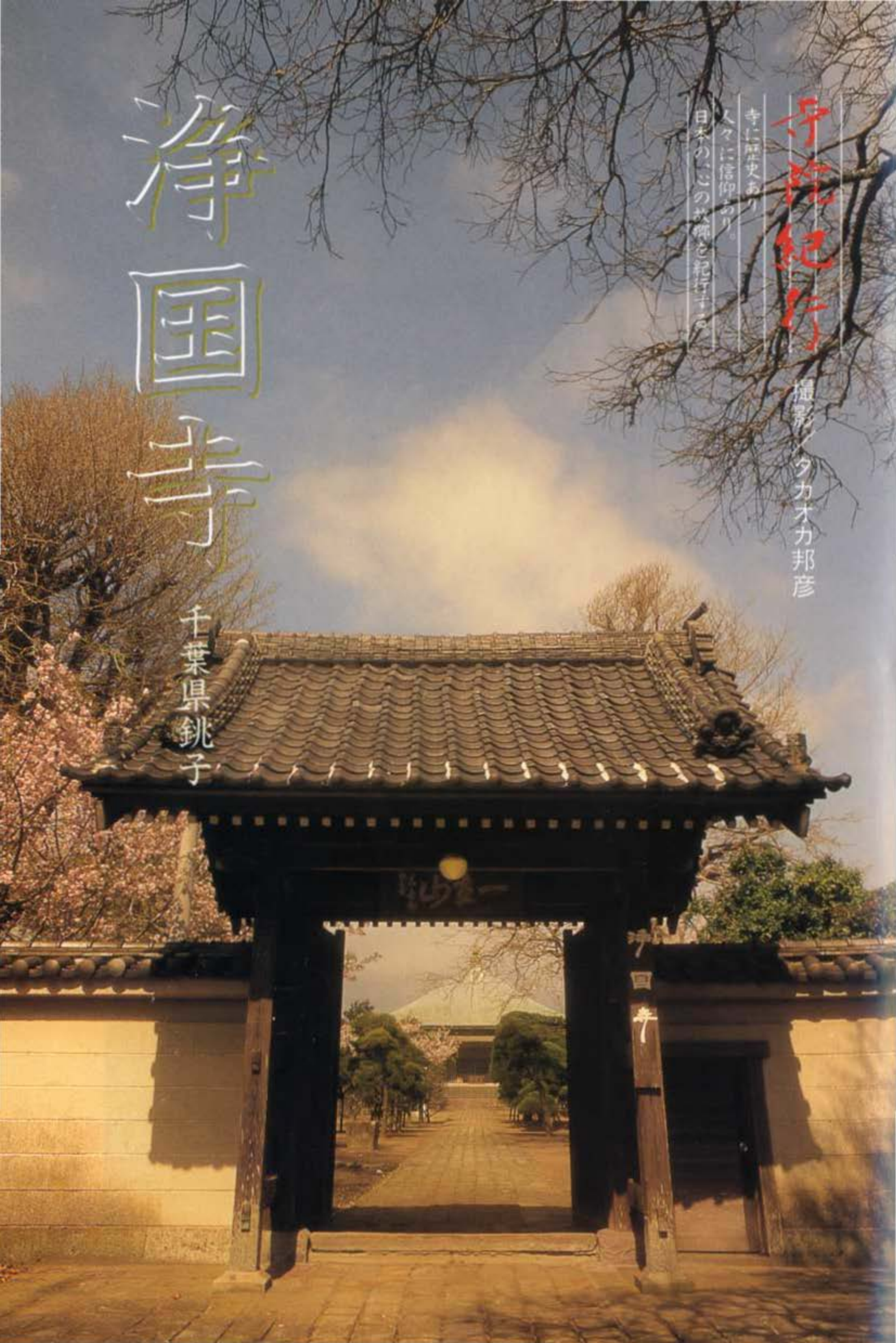
寺院紀行

撮影／タカオカ邦彦

寺に歴史あり
人々に信仰あり。
日本の、この故郷を紀行する。

浄国寺

千葉県銚子



千葉県銚子
浄国寺



本尊は阿弥陀如来。熊野堂にも阿弥陀さまが奉られている

本堂から見た境内。
左が客殿、庫裡。右に鐘楼





寺宝である徳本上人画像

外川の共同墓地にある徳本上人の名号石碑。ここで法要を行う



長崎の海岸でも浄国寺は法要を行う



徳本上人をお迎えしたときの
段取を記した『請待日記』



仙台からの米を載せた船がよく沈んだという利根川河口と、そこを見下ろす丘にある川口千人塚



海上氏の烏帽子

浄国寺の本堂裏にあった望西台の墨画（墨画帳より）



浄土

1997/6月号 目次

カラーグラビア寺院紀行	写真=タカオカ邦彦	3
法然さんがわかつちやいねえな	慶野匡文	8
寺院紀行 銚子 浄国寺	真山 剛	14
表紙は語る 灯台 闇を照らす光	岡 克己	23
御法語に聴く		24
若和尚のちょっといい話		29
連載小説「法然上人をめぐる人々」	石丸晶子	30
日常仏教語		37
信仰相談	大室了皓	38
続 午後の日差しの中で	吉川英明	42
いい加減にしろ		49
うまい野菜と料理の話	我田 大	50
J NEWS 詩人山田隆昭氏に聞く		56
Jフォーラム		61
事務局便り		69
編集後記		70



表紙題字=浄土門主 中村康隆猥下
表紙撮影=岡 克己
アートディレクション=近藤十四郎

“法然さんが

わかつちや

いねえな”

慶野匡文

「アトヲ、一廟ニシムレバ、遺法アマネカラズ。予ガ遺跡ハ、諸州ニ遍満スベシ。ユエイカントナレバ、念佛ノ興行ハ、愚老一期ノ勸化ナリ。サレバ、念佛ヲ修セントコロハ、貴賤ヲ論ゼズ、海人漁人ガ、トマヤマデモ、ミナコレ予ガ遺跡ナルベシ。」

(勅修御伝第三十七)

法然上人は、建暦二年、西暦でいいますと一二二二年の一月二十五日に西方極樂浄土に往生なされましたが、上人のご臨終ま近のお言葉一つ一つには、特にありがたく、胸をうつお言葉がございます。その中の一つがかかげましたお言葉で、建暦二年一月三日、ご臨終二十日余り前のお言葉であります。

五年にわたる配所での御苦勞や僅か一ヶ月前の帰京の旅のお疲れもあつてか、八十という御高齢の法然上人は、この最後の年、建暦二年の一月二日より益々お食事もすすまなくなり、お弱りになりながらも、ひとえに往生のことをお話しになり、念仏を称え、人にもすすめていらつしやるのです。

お弟子さんをはじめ、信者の方々が心配なさるのも無理ありません。人々のご臨終が近いのかと思えば思うほど、今こそお念仏のこと、往生のことなど法然上人のお口よりお聞きしたいと思つていたと思います。

お弟子の法蓮房信空さまが、上人におたずねになります。たずねずにはいられないという方が実際のところでありましょう。

昔から高德の方々、弘法大師さまや伝教大師さま等には、みな立派なお堂やら伽藍やらのご遺跡がおりますが、お上人さまには今まで一つとしてお堂などお建てになつていら

れません。ご往生なされた後、私ども弟子たちはどこをご遺跡としたらよろしゅうございましょうか。

この質問に答えて、法然上人は、

「遺跡を一つのお堂に決めたら、念仏の法門は弘まり行きわたりません。私の遺跡は全国津々浦々にまで広がることになりました。なぜなら、口称念仏の法を弘めることこそ、私が生涯をかけて勤めてきたことです。故に、一声一声の念仏には、私の全生涯がそこにあります。だから、お念仏をお称えする者がいる所は、貴賤を問わず、海辺にある漁をする人々の芽ぶきの小屋に至るまで、みな私の遺跡となるのです。」

と力強くおっしゃるのです。自分が生涯を通して全てをかけ、命をこめたのは、お念仏を声に出して称えること、それが阿弥陀さまの本願に応えることだということです。だから、念仏の声のする所、そこそが私のいる所です。私の遺跡は一つの場合にとどまらず広がってゆくでしょう。お念仏をお称えする者がいる所は全て、私の遺跡になるとおっしゃるのです。

この力強いお言葉、何というあたたかいお言葉でしょう。法然上人が生涯を尽くしてお念仏を伝え、弘めてこられた信念と力強さとあたたかさがにじんでおります。この確信にみちた法然上人のお言葉をしっかりといただかなければなりません。私が一声念仏を申すと、この声のままそこが法然上人の遺跡となり、そこに法然上人を感じるのです。何と力強く、うれしいことではありませんか。

この御法語を拝受し、これ程までありがたく力強いお言葉をいただきますと、私どもお

念仏せずにはいられないような思いにかられます。

さて、昨年末、私の祖父にあたります先代住職の三回忌をつとめました。祖父は、大本山増上寺に長い間お世話になり、また晩年は、別院の茨城弘経寺にて法務にたずさわっておりまして。そのため、お寺のことなどを私に話してもらう機会は少なかつたのですが、この三回忌を迎えるにあたり妙に思い出すことがありました。

それは、私が大学に入った当時のこと、関西の大学に通うため東京を離れていた私が久々に自坊の施餓鬼の手伝いに帰った時のことです。前日、夜遅くまでお塔婆を書いている祖父が傍らにいた私に、

「関西に行つて、おまえ、毎朝おつとめしているのか。」

とニヤニヤ笑いながら言うのです。私は、

「そりやあ、本堂もないし、仏壇もないし、できないよ。それに、朝は一人でごはんをつくつたりして忙しいんだ。」

と言うと、たつた今のニヤニヤ顔がスーっと消えて、

「おめえは、法然さんがわかつちやいねえな。」

とピシヤと言われたのです。傍らの人には何気ない会話に聞こえたかもしれませんが。しかし、私にはその時のニヤニヤ顔がスーっと消え、厳しく冷酷無情のこわい顔からでた、法然さんがわかつちやいねえ”は強烈な印象として残りました。大きなパンチをうけた感じでした。何か胸の中もスッキリしないまま、祖父に怒られたような気持ちでそのまま年月も経ち、そんなひとこまがあつたことも次第に忘れ去られ、結局それっきりで祖父も極楽

浄土へ往生しました。

時は経ち平成八年。昨年です。私も法務に勤しみ、布教の勉強等も真剣に始めていた時でした。法然上人の先ほどの御法語を何気なく読んでいた時、タイミングがよかったためか特に心に衝撃みたいなのがありました。私は現在、自坊から少し離れたアパートに住んでおりまして、その二階の人から、こんなことを言われたのです。

「慶野さんの所はいつも、ナムアミダブ、ナムアミダブって声がしているねえ。子供さんたちもえらいねえ。」

私の家では、食事の前には必ずお十念してお食事をいただき、夜などはお十念をお称えして今日の反省をさせているのですが、最初の頃は恥ずかしそうにやっていました子供たちも、最近は大きな声でお称えしていて、そうした声が聞こえているのでしよう。えらいだなんて、たいしたことないですよと返すと、

「アパートの中でも簡単にお寺になっちゃうね。」

と言うのです。この時、何か私自身ハッとしました。法然上人のこの御法語と祖父の言葉がよみがえり、それら全てが、一本の糸のようにピンと筋が通ったような思いになったのです。お念仏をお称えする場所などどこでもいいのです。どこでも素直にお念仏が称えられ、念仏の声のする所、そこは阿弥陀さまが坐しまし、法然上人の遺跡となるのです。念仏の声のする所はどこでも、このアパートも法然上人の遺跡となるのです。

長年忘れ去られていたひっかかりが、何かの拍子にスーっとなることがあります。今回の私の場合は、祖父の三回忌を迎えるにあたり、法然上人が導いて下さったのかもしれま

せん。「おめえは法然さんがわかつちやいねえな。」それは、おそらく「お念仏はしつかりどこへ行っても称えよ、場所が変わってもお念仏を称えることを忘れちやいけないぞ」ということを自坊から遠く離れて生活している私にむけて、厳しく伝えてくれた言葉だったのでしょう。

何かと屁理屈を言ってお念仏をお称えできなかつた自分を、今では本当に恥ずかしく思います。お念仏が相続され、お念仏の声する所に法然上人は必ずいらつしやるのです。法然上人のおつしやられた、「念佛ノ興行ハ、愚老一期ノ勸化ナリ。」というお言葉、しっかりと受けとめねばなりません。

法然上人は、私どもの一人一人の心の中に遺跡をお建てになつてこられたのです。一山一寺の遺跡の次元ではないのです。お念仏をお称えする私どもの声するところに法然上人は息づいていらつしやるのです。

毎日の生活に追われる私どもですが、どこでもお念仏はお称えできるのであり、お念仏のある所は法然上人の遺跡であり、法然上人が息づいていらつしやるのだということ、また、生涯かけてお念仏を弘めてきたと自信をもって断言なさる法然上人のみ心をいただくことが、尊い受けとり方ではないかと思ひます。

私どもは、お念仏に縁を持ったものでございます。法然上人の尊い恩徳をいただき、いつでも、どこでもお念仏をお称えしてまいりましょう。

神奈川県・横須賀市・光雲寺

の市だが、明治十三年に発表された千葉県初の統計では人口、戸数ともに最も多く、二番目の船橋より人口で一・五倍、戸数では二倍という千葉県最大の町だった。

銚子の輝かしい歴史は徳川家康が関東に移封されてから始まったといつてよい。江戸を拠点とした家康は利根川の付け替え普請に着手した。当時の最も優れた交通は船だった。つまり八百八橋などというが、橋が多いとは水路が縦横に走り、そこに色々な物資を載せた船が行き交い町が栄えていたことを意味する。

そこで家康は諸国の物資を載せた船を迎え入れる港、そしてその港へ注ぐ川や水路を整備することを第一とした。その港に選ばれたのが銚子なのである。

家康は利根川が注ぎはするものの遠浅の江戸湾に港を作る事をあきらめ、逆に利根川の流れを海路の入り口としては絶好の地であった銚子にしたのである。そこで利根川の付け替え普請、銚子の船入（湊）普請に全力を注ぎ、一六五四年の利根川東流完通、七年後の銚子外川港の完成で江戸への水路工事は終わりをみたのである。

これにより銚子に入った船の荷は利根川を溯り、途中から南下、江戸に入る。家康は現在で言うバイパス、高速道路を完成させたのである。この高速道路のおかげで仙台の米や海産物、あるいは紀州の醤油が入ってくることになる。海上から江戸へ入る諸国の物資の

境内にある松尾芭蕉の句碑



入り口、それが銚子なのである。そして銚子は利根川の上流に位置する高崎藩の飛び地、松平家の直轄地として当時最大の商業地となる。さらに恵まれた漁場により漁師町としてそれに輪をかける。多くの豪商が軒を並べたのは言うまでもない。

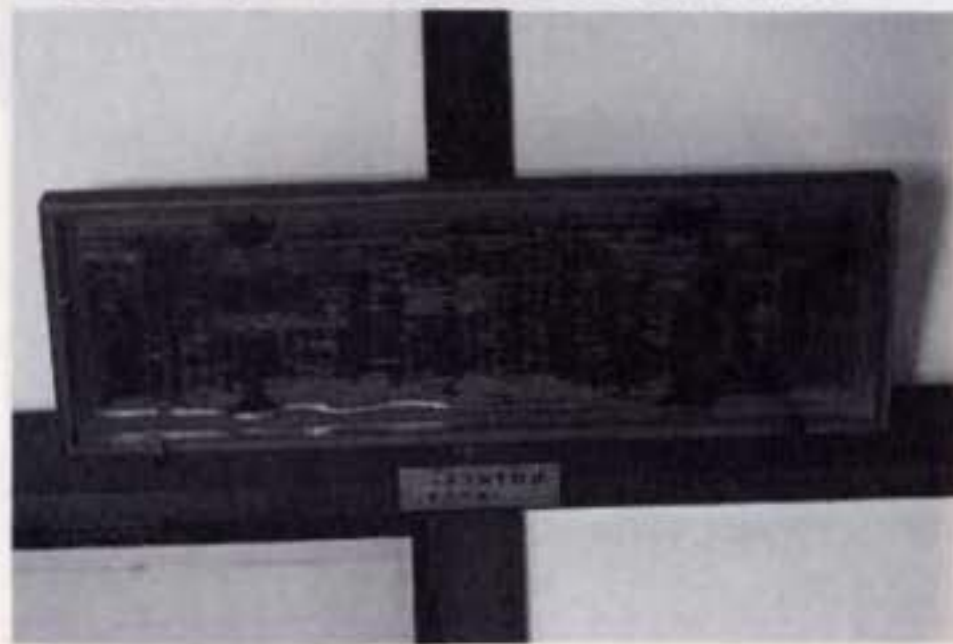
豪商といえば紀州からの多くの移民によって銚子の名物となった醤油も忘れてはいけない。一年中温暖で湿気の多い気候が醤油作りに適していたため、一六一六年に田中玄蕃が、一六四五年に浜口儀兵衛がこの銚子で醤油作りを始めた。今のヒゲタ醤油とヤマサ醤油である。この醤油作りはさらに利根川を溯り、一六六一年には野田で高梨兵左衛門が始め、これが今のキッコーマンとなった。

さてこうした豪商、あるいは漁師たちが大切にしたものがある。それが神社仏閣である。

全国からの様々な物資を載せた船や大漁に喜び勇む漁船がこの銚子の港に入らんとした時によく沈没するという。広い河口ゆえの潮の満ち引きの速さ、あるいは太平洋からの突風に船が翻弄されるといふ。いまでも河口の海の底には仙台藩の米が沢山沈んでいると言われる位である。

川口千人塚と呼ばれる船乗りの塚が港を見下ろす小高い丘にあるが、これは一六一四年の天津波に一度に千人もの人が溺死したことから付けられた名前だという。浄国寺はここで毎年施餓鬼会をして

「称讃寺規式条々」寺内法度として貴重な物だ



いるが、昭和三十五年に建立された海難漁民慰霊塔にはいまでも物故者の名前が彫られ続けている。

こうした物故者への供養、あるいは豊漁や安全祈願と、銚子の神社は地元民に篤く守られてきた。決して広くはない銚子には二十八の寺がある。そのうち二十以上が真言宗智山派で、浄土宗、天台宗、浄土真宗、日蓮宗はそれぞれ一か寺づつしかない。がそのどれもが現在も一万坪以上の境内と千軒以上の檀家をもっているという。殿様もいないし、城下町でもないことを考えると、この寺の数と大きさは普通ではない。つまり特定の後ろ楯を持たなくてもやっていけるだけの援助をしてくれる檀家が多いということだ。

それを今に伝えるエピソードがある。浄国寺は一七二三年に火事で伽藍のすべてを失ったが、なんと一年半後には本堂を再建、しかもその間に土地を買い足している。その経済力がどこにあったのか、詳らかになるものではないが神仏に篤い土地柄、経済力のある住民が多かったと考えるのが適切なようなのである。

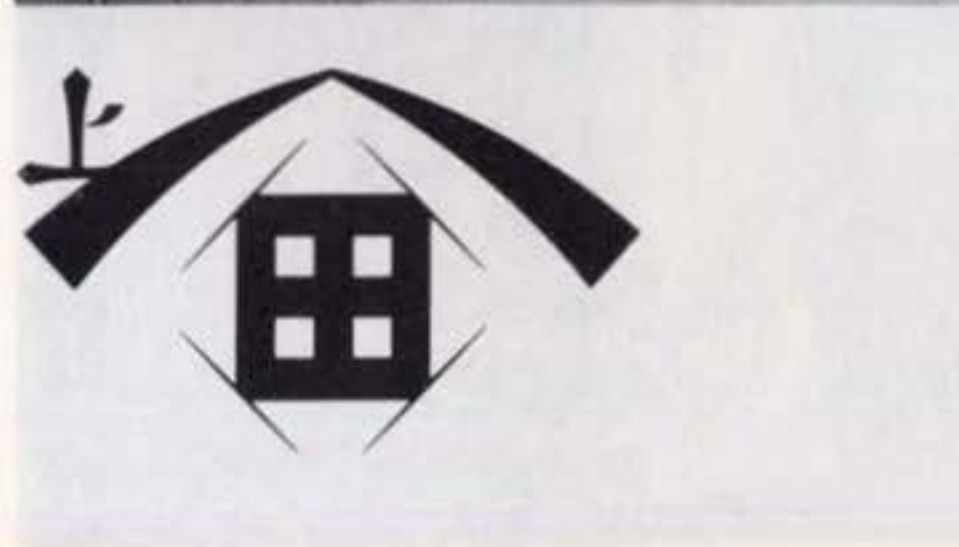
さて、浄国寺の縁起だが、浄土宗の三祖良忠が開山で開創は二二五五年、となっている。しかしこれを裏付ける資料はないが、その前身といわれる東照山称讃寺は千葉に広がった元平家の六氏のうちの海上氏の菩提寺であるといわれている。寺宝は数多く、前出の称讃寺の規式条々とよばれる寺内法度、浄国寺縁起絵巻、徳本行者の

浄国寺縁起絵巻。開山良忠上人の布教の図





銚子電鉄の銚子駅。
駅から徒歩十分のところにあるヒゲタ醤油。
写真は資料館。そしてヒゲタのマーク



いるが、昭和三十五年に建立された海難漁民慰霊塔にはいまでも物故者の名前が彫られ続けている。

こうした物故者への供養、あるいは豊漁や安全祈願と、銚子の神社は地元民に篤く守られてきた。決して広くはない銚子には二十八の寺がある。そのうち二十以上が真言宗智山派で、浄土宗、天台宗、浄土真宗、日蓮宗はそれぞれ一か寺づつしかない。がそのどれもが現在も一万坪以上の境内と千軒以上の檀家をもっているという。殿様もいないし、城下町でもないことを考えると、この寺の数と大きさは普通ではない。つまり特定の後ろ楯を持たなくてもやっていけるだけの援助をしてくれる檀家が多いということだ。

それを今に伝えるエピソードがある。浄国寺は一七二三年に火事で伽藍のすべてを失ったが、なんと一年半後には本堂を再建、しかもその間に土地を買い足している。その経済力がどこにあったのか、詳らかになるものではないが神仏に篤い土地柄、経済力のある住民が多かったと考えるのが適切なようなのである。

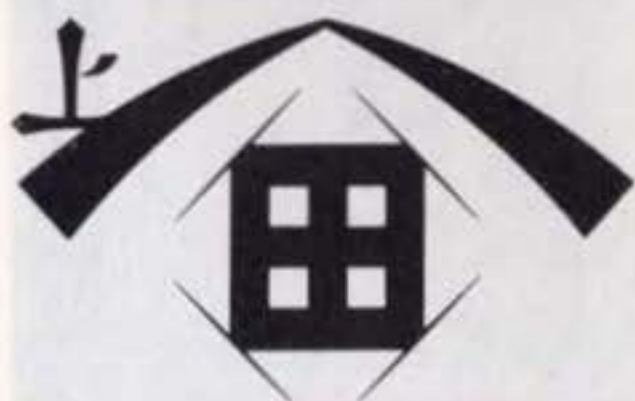
さて、浄国寺の縁起だが、浄土宗の三祖良忠が開山で開創は二二五五年、となっている。しかしこれを裏付ける資料はないが、その前身といわれる東照山称讃寺は千葉に広がった元平家の六氏のうちの海上氏の菩提寺であるといわれている。寺宝は数多く、前出の称讃寺の規式条々とよばれる寺内法度、浄国寺縁起絵巻、徳本行者の

浄国寺縁起絵巻。開山良忠上人の布教の図





銚子電鉄の銚子駅。
駅から徒歩十分のところにあるヒゲタ醤油。
写真は資料館。そしてヒゲタのマーク



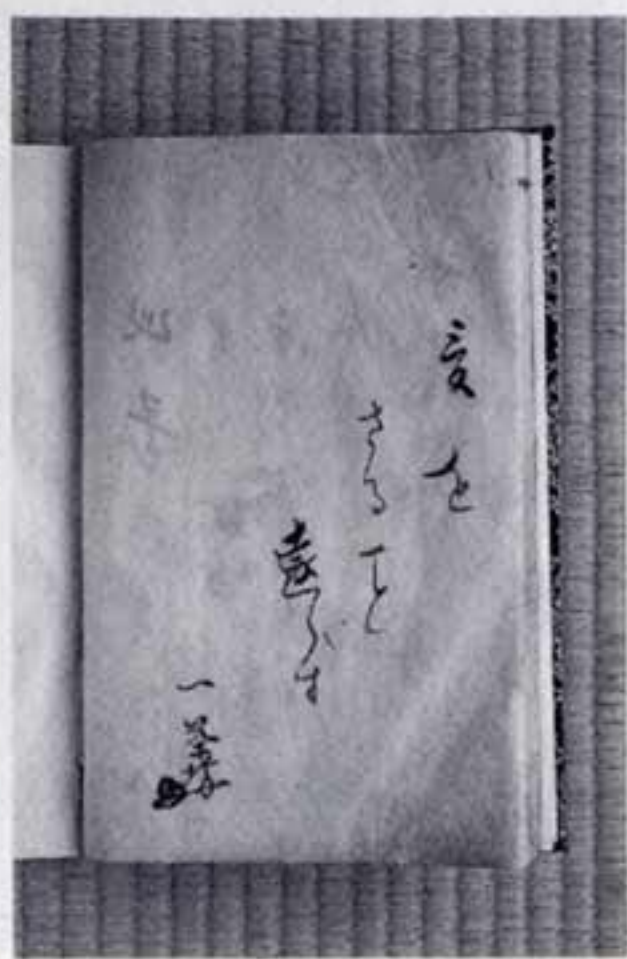
画像・名号石碑、そして墨画帳などが保存されている。この墨画帳には小林一茶や渡辺華山といった錚々たる作品が並んでいる。また松尾芭蕉の句碑や望西台と呼ばれる俳人たちが集まった場所の跡も境内にはある。江戸の入り口だった銚子には多くの俳人、文人がやって来た。江戸時代はもちろん、明治になり総武線が通ってからもその数は変わらなかったようだ。

『銚子と文学者とのふれ合い』という銚子教育委員会による本がある。サブタイトルが「銚子の文学碑めぐり」だが、その目次を見ると学校で習う著名な文学者がずらりと並んでいる。名前を挙げようにも取捨選択できないぐらいだ。気候風土に恵まれた銚子は明治時代ぐらいまでは避暑地でもあったという。今でこそ東京からのリゾート地というと箱根や軽井沢、那須などだが、銚子もかつてはそのひとつで、その経済力ゆえ、多くの文人が呼ばれたことも多かったようだ。

また銚子は念仏行者徳本上人の教化地でもあり、外川とかわの三昧を始め五つの名号石碑や言い伝えが残り、浄国寺も法要を欠かさない。

こうした浄国寺の法灯を受け継いでいるのが、第十八世道誉俊明住職だ。高校三年生の時に先々代であった父を亡くし、親戚に住職を兼務してもらっている間に、大正大学、同大学院を卒業。否応なしに寺に入ることになるが、大学時代の四年間は東京の下町のお寺

墨画帳に残る小林一茶の句



に住み込みで入ったり、住職になってからも青年会の活動や地元のJCに積極的に参加した。ある意味で僧侶の道以外選べなかった状況の中で、逆に僧侶や寺の在り方、宗教の価値などを自問自答し続けて来たという。そして、人々が宗教に何を望んでいるかを肌で感じるためにも社会との直接の触れ合いをもとめた。檀家だけでなく、誰とでも会う。中途半端はいけないと寺以外の活動に身を置いた。社会に出ることと時代にあった僧侶になる——二十三歳で大きな寺の住職にはなったものの、自分には寺の肩書だけで、自信も経験もない。そこで社会、地域に飛び出すことで自らの血や肉を育み、スタンスを築いてきたのだ。背広姿が似合うのは、こうした考え方を実行している証しに外ならない。

この住職を育ててきたのが、先々代の奥様であり現住職の母である増枝さんだ。昭和を代表する書家、柳田泰雲の弟子で秀翠の名で『美術年鑑』に載る書家である。増枝さんも浄土宗婦人会の要職を長年努め、また寺での書道教室も二十三年目を迎える。平成七年には学書院展の最高賞である芸術大賞を受賞した。

住職はテンプルコンサートと銘打って、地元の人々を別け隔てなく寺に呼んでいるが、こうした文化活動の根源には先々代の「銚子に文化を」という理念が流れている。浄国寺に文化協会をおいた先々代は昭和三十七年に本堂を再建したが、本堂はコンクリートの打ち

墨画帳に残る渡辺華山の句と墨画



放しで、客殿につながる長い廊下はギャラリーに使えるように作っている。当時としては斬新極まりない本堂だ。

地元の文化活動の震源地としてまさに衰えることを知らないのは、まさに無衰院の名に恥じないものだろう。

取材後に住職は「ロータリーに行きますので」とお出掛けになった。社会と共に生きる浄国寺の活力はここにある。

(ルポライター)

住職のお田さま杉山秀翠さん。
学書院展芸術大賞受賞作品の前で



灯台

撮影●岡 克己

闇を照らす光

闇の夜

漆黒の荒涼たる海に
投げ出され揉まれつづける一隻がある
波の音、船体の軋み
すなわち長い航海の疲労と不安
が頂点に達するとき
遠く、微かに
一条の光が見える
驚愕
わき上がる希望
生かされていることへの歓喜
光は次第に太く強く眩い力となって
船を包み込み
確かな航路へと導く

灯台

長い歳月を越えて
聳え立つ塔

6月

あまるべざき

余部埼灯台 (兵庫県の日本海側)

有名な余部埼鉄橋の近くにある、日本で一番高いところに立っている灯台（海面から灯台の光点まで284Mもある）。灯台が完成したのは1951（昭和26）年3月25日。現在の灯台は1985（昭和60）年に立て替えられたもの。光が届く距離も日本一の灯台です。この地にしか育たないという「平家かぶら」が自生している。位置／北緯35度39分49秒、東経134度32分32秒。単閃自光、毎15秒に1閃光。



岡克己プロフィール■1948年岡山県倉敷生まれ。風土写真家、中村昭夫氏に師事。『Aqua21』に連載された「水のある風景」が高い評価を得る。灯台はライフ・ワーク。全国120カ所、2000枚に及ぶこれらの作品はCD-ROM『日本の灯台 第一集』（発売／ジェイ・ブレジデント）として好評発売中!!

御法語に聴く

かならず専修の念仏は、
現当のいのりとなり候なり

(鎌倉の二位の禪尼へ進ずる御返事)

専らお念仏を称えることは、必ず今生にも後生にも通じる祈りになるものです。

他力
は
他力

この春、私が住む長野は、秘仏、善光寺如来の御開帳で賑わっている。本誌の発行と同時に御開帳も幕となるが、期間中の参拝者数、およそ四五〇万人が見込まれているという。一日平均八万人、日によつて二、三十万人にも及ぶ。長野市の人口が三十六万人だから、これがいかに圧倒的な数字かご理解いただけるだろう。老いも若きも、男も女も、とにかくものすごい人の出なのだ。

御開帳の風景の中でシンボルといえば、やはり回向柱であろう。本堂の正面に高さ十メートルにも及ぶ巨大な卒塔婆がそびえ立ち、如来さまと善の綱で結ばれている。「手で触れたならば如来さまに触れたのと同じ功德がある」とされ、人の手が届く限り黒ずんでいる。回向柱は、こうしてさまざま祈りを受けとめているのだが、なかには念には念を入れてという祈り方もある。柱の裂け目にお賽銭が挟み込まれ、小銭が何十センチも並んでいるのだ。回向柱の前にも立派な賽銭箱がちゃんとある。けれども、たとえ数センチでも如来さまの前に進み出てお願いしたいことなのだろう。しかも「ご

縁」をもじってか五円玉が目につく。いつの間にか定着した庶民信仰の工夫であろうか、こうなると余程聞き入れてもらいたい事情があるに違いない。如来さまとて耳を傾けるというものだ。

家内安全、商売繁盛、身体健全、病氣平癒、学業成就、厄除け、安産等々、ご祈願の題目は人生の節目の分だけ用意されている。

先年、寺の仏像を修復した記念にと、お檀家さんに「写仏お守り」なるものをお勧めした。各人が下絵にそって仏さまの姿を描き、願い事を書き入れたら祈り畳んでお守り袋に入れる。お寺でお魂入れをして、肌身離さぬお守りにしていただくというものだ。小さなお子さんは将来の希望を、受験生なら志望校合格。一家のご当主や奥様となれば、家族の健康や交通安全など家内安全を願う。それぞれ事情に応じて、いろいろなお願い事があるものだ。しかし、一生の最期に何か一つとなるとどうだろうか。

「冥土の旅をよろしく願います」。ある一人暮らしのおばあさんの願い事だ。確かにご高齢だが、ふだんは陽気でかくしやく嬰鑠おばあさんとしている

方だけに襟を正す思いがした。この世の望みなんてもうそんなにな
いよ、そんな心境だろうか。そう遠くない自分の死を、自然と受け
入れてなければ、そう簡単に言えないことだと思ふのだ。

法然上人のお言葉のなかに「機縁純熟」という言葉がある。お念
仏の教えを聞いて、誰しもがすぐさま極楽往生を願うようになるわ
けではない。人生のいろいろな段階を踏みしめ、さまざまな人と出
会い、豊富な体験をする。御開帳に出会うこともその一つだろう。
そんな中でお念仏を称えようと思える機会が自然と訪れるという意
味だ。

ご承知の通り阿弥陀さまには四十八の願がある。「衆生の願いを
かなえてあげたい」というのが阿弥陀さまの願いであり、私たちの
願い事そのまま阿弥陀さまの願い事ということになる。年齢、性
別、家族や居住の環境、仕事や体調といったさまざまな事情によつ
て、私達たちの願い事は変化する。阿弥陀さまは、私たちの願い事
が種々雑多であることなど百も承知で、懲りもせず最期までお付き

合いして下さる。よりよく生きたいと願うかぎりこの世の祈りは尽きやしない。しかしそう祈るからこそ、いつかは「冥土の旅をよろしく」と願うようになる。それを待っていていらっしやるのだ。

お賽銭を回向柱の裂け目に挟み込む、そんな衝動に駆り立てられるほど祈ってみるのも、その人なりによりよく生きたいという願望の現れなのだろう。たとえ日頃からお念仏を称えていようと、この世の願い事さえ阿弥陀さまに委ねられないようで、どうして後の世のことだけを願うことができるだろうか。往生という一大事でも些細なお願い事でも、他力は他力。この世のこととあの世のこととも、何事も南無阿弥陀仏。何度でも阿弥陀様にお付き合いしてもらえばいいのだ。やがて肩肘張らずに往生を願う自分がいるはずだ。

（浄土宗総合研究所研究員・袖山栄輝）

友人の結婚披露宴の帰り路。

「お客さん、着きましたよ」

「ン……？」

電車を降りた私を迎えてくれたのは、もうほとんど照明の消えかかった、見覚えのない駅でした。そう、そこは、私が降りるべき駅を三〇kmも過ぎた終点だったのです。既に上りの終電車がないことを知り、愕然としてタクシー乗り場へ。

クルマのスピードに負けじと駆ける料金メーターに目をやりながら、この時ほど「過ぎたるはなお及ばざるが如し」を痛感したことはありません。「調子についてあんなに飲むんじゃないかな」った……。今頃悔やんでもあとの祭りです。

寝過ぎは不可抗力（？）の

若和尚の

二十五其 し な は い い ト ツ ヨ チ

「過失」とはいえ、たどってみれば、そこにはやはり要因が。結果を危惧しつつもついつい度を過ぎ、痛い思いをする。

仏教の根本を貫く「因果応報」

の思想は、こんなところにもちやんと染み及んでいるのでした。

思えば、「過ぎたるは……」なることが、私たちの日常には何と多いことか（私の恥すべき事例を正当化するわけではありませんが）。とにかくありとあらゆる場面でいつもその可能性が顔を見え隠れさせています。

そして振り返れば、人間の歴史は「過ぎたるは……」のごとき「過失」の繰り返しではなかったでしょうか。得てきたものは確かに大きい。しかし、失ったもの、そしてこの先失うやもし

れないもの、ことは、それよりもはるかに大きいのではないのでしょうか。

「クローン人間完成間近」のニュースが、環境問題、医療問題の記事が、人々のところを、そしていのちを競々（きょうきょう）とさせている昨今。人間の向上心が欲望と化し、その産物が「あるじ」を振り切って、手綱の届かない所に走り暴れていこうとしている、恐ろしい現実。「小なりとも、火を軽ろんずべからず」（雑阿含経）。

お釈迦様が、はるか二千数百年も前に、私たちのためにおくってくれたメッセージを、もう一度考え、あらためてとらえるべき時がやってきています。

（正）

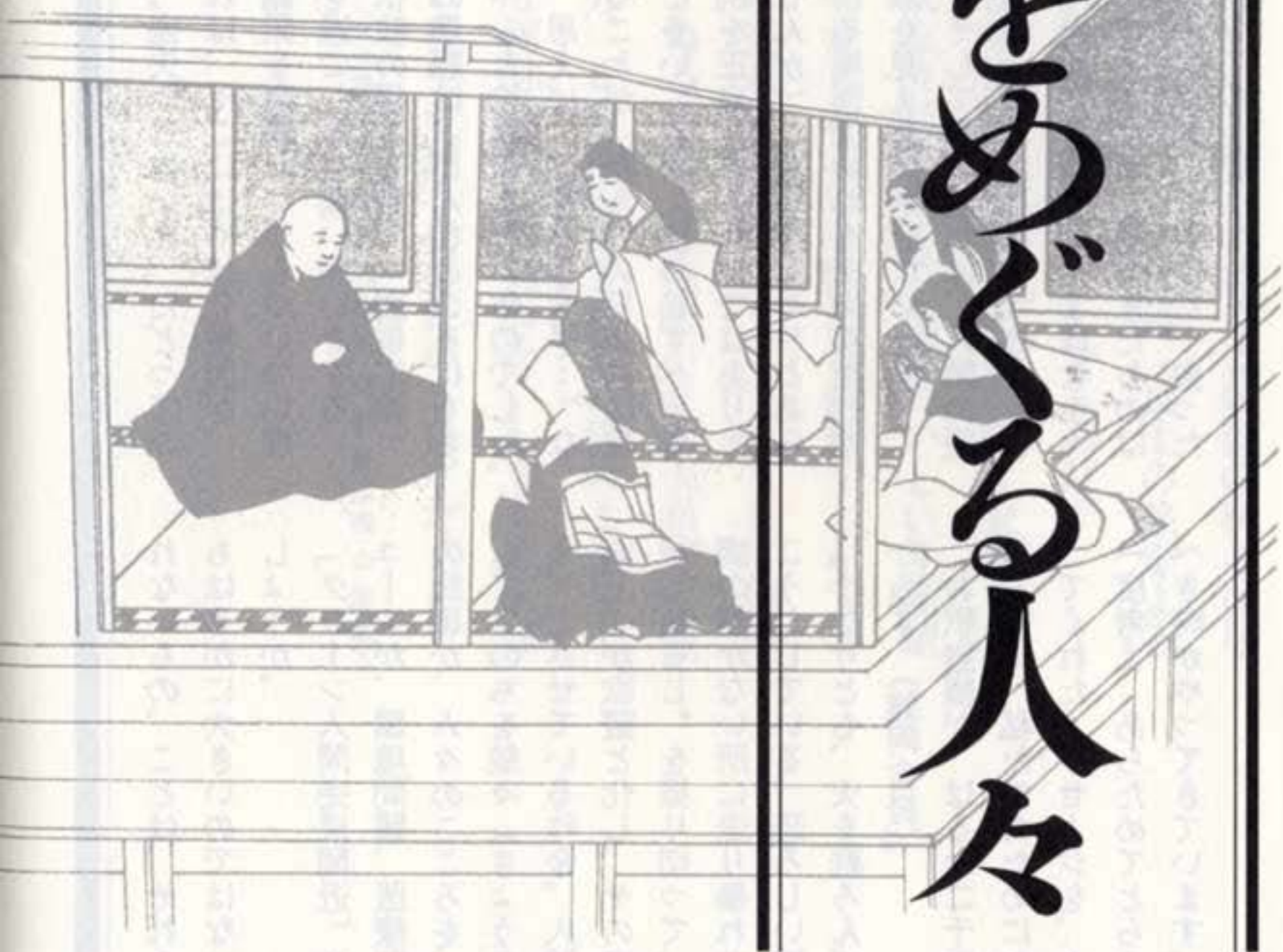
連載小説

法然上人をめぐる人々

【第五回】

漁師と遊女たち

石丸晶子



一

「魚はいらんかね。魚はいらんかね。播磨は高砂からの魚でござります。鯛にひらめに、鰯もござります」

建永二年二月十八日の暮れ方、高砂の漁師乙吉は、人通りもまばらな西猪隈小路にしいのくまこうじを、四条から三条に向かい、ゆっくり歩きながら声を張りあげた。

乙吉の肩がかつぐ天秤棒には、前後に大きな魚籠いづがつるされ、春の夕陽が、うすく塩をふられた魚籠の魚に射している。

彼が今歩いている右京には、かつては東市と並ぶ京の台所西市があつて、買い物客でにぎわつたものだった。しかし近年、西市はすっかりさびれて田園と化してしまい、そのお蔭で右京一体は、魚をはじめ米や塩、炭、紙、豆腐、煎じ薬や草履等々の行商人にとり、商売繁盛の有難い地域となっていた。

日頃は瀬戸の海に網をかけたり、釣り糸を

たれて漁をする乙吉も、年に何度かは仲間とともに小舟を漕いで京に入り、洛中を行商して魚を売りさばくのである。

高砂を出て江口、神崎から淀川に入り、そのまま舟で川をさかのぼれば、一日半の行程で洛南鳥羽の港に着いた。

「魚はいらんかね。魚は——」

小路沿いに建つ、さる公家の屋敷の台所口に立つて、乙吉がふたたび声を張りあげたとき、がらつと戸口が開いて、顔見知りの雑仕ぞうし女めかし櫓が姿を見せた。

「やつぱり乙さんじゃないか。声を聞いてそうじゃないかと思つたよ。しばらく顔を見せなかつたのは、どうしてだい」

乙吉が天秤棒を肩からはずして、魚籠を地面におくと、櫓はなかの魚にちらつと視線をはしらせて、

「なかなか美味うまそうな魚を持ってきたじゃないか。でも今日は間に合つちまつたよ。お前さんより一足早く、昼すぎに和泉いずみの漁師が売りにきてさ。この辺の屋敷じゃ、みんな魚を

買つちまつたあとさ」

ちつ、と乙吉は舌打ちした。

「どうりで売れねえと思つたよ。しかし櫛どの、和泉と高砂では、魚の美味さがちがおうじゃないか」

だが櫛は乙吉に頓着せず、つと身体を近づけると、乙吉の耳に口を近寄せて、

「お前さん、聞いたかい」

「何を」

「法然上人さまが、院のお怒りにふれて流罪になつたんだよ。さつき、お屋敷の殿が御所からお帰りになつて、それはもう大さわぎさ。何しろ、こちらの殿は法然さまに帰依していなさるからね」

「な、なに。一体どういうことだ」

「だからさ。法然さまが京を追われて、流罪になることに決まつたと言つてゐるんだよ。お前さんも京に来たときは、ちよくちよく吉水の御房にお参りしてゐるって、言つてたじゃないか」

突然の櫛のことばに、乙吉は急に目の前が

真つ暗になる思ひであつた。

もう何年以前のことになるか、行商の折々、巷のうわさに法然とその教えのことを耳にした彼は、商いを終えた或る日、吉水の坂道をのぼつていったのであつた。以来、京に来るごとに、帰途に着く前、彼は東山の法然のもとに参ずるのを、唯一の心のよりどころにしていた。

茫然としたなかで乙吉は呟いた。

「——なぜまた、院のお怒りにふれたんだね。どうしてなんだ」

「お前さん、何も知らないのかい。これだからいやになつちまう」

あきれた、という身振りをしながら櫛は、

「この前、お前さんが京に来たのは、たしか去年の夏だろう。あれから、京はちよつとした騒ぎさ。秋には、法然さまは吉水の御房を出て、小松谷に移られるし、暮には、二人のお弟子が院のお怒りがもとで死罪さ」

「……」

「ほれ、鹿ヶ谷の草庵で六時念仏をしておら

れた安樂、往蓮さまだよ。御院寵愛の女房二人が、このお弟子の法話に感じなされてね。それで二人とも、院のお許しなしに出家しまわれたわけさ」

そういえば、おれも一度、鹿ヶ谷で聴聞したことがある、大へん美しい、惚れ惚れするようなお坊さまであつた、と乙吉は思い出した。被^{かつ}き物を被^もつた高貴な身分らしい女房たちや、町家の男や女、そして遊女や通りすがりの旅人までが詰めかけていた。

「お弟子の罪は師匠の罪、と院はお怒りなそうな。まあしかし、お屋敷では、うしろに叡山が糸をひいてるつてもつばらのうわさだよ」
「で、法然さまはどちらにお流されになるんだね」

「土佐だよ。ずいぶん遠いじゃないか。それだけ院のお怒りにふれたわけさ」

「今、法然さまはどちらにお出でだね。まさか、もう土佐にお立ちでは——」

慳は舌打ちして、

「まだ小松谷においでだよ。お屋敷の殿も先

刻、小松谷にお駆けつけさ。お前さんも行ってみな」

慳のことばをみなまで聞かないうちに、乙吉は天秤棒と魚籠を地面に放り出したまま、小松谷に向かつて駆け出していた。

二

安芸の国生口^{いくちのしょう}荘は、後鳥羽上皇の叔母宣陽院^{きんし}親子が所有する皇室領である。

法然に配流の命令が下つた同じ日、女院御所へ、莊園管理の報告のために上洛した生口荘の代官守平は、その夜、伏見の旅宿で、室ノ津の遊女梅菊から酌をされて酒を飲んでいた。室ノ津は、今でこそ波静かな小さな泊^{とまり}になつてしまつたが、この当時は瀬戸内きつての遊女と漁師の町。西国と京、さらには関東のあいだを上り下りする役人や商人たちが必ず立ち寄つて賑わう港町であつた。

港の近くには幾十軒ともしれぬ遊女屋が軒をつらね、長者とよばれる女性管理官によつ



て統括されていた。

そして遊女たちは、しばしば都に行く旅人に伴われて京に行き、旅人が帰郷するときに、ふたたび室ノ津まで同伴されて返ってくるのである。

「今日、女院さまのところで、お仕えする侍から聞いた話だが」

と紙燭の灯影で、盃に酒をさされながら代官は言った。

「そなたは知るまいが、東山の御房においての法然上人さまという御方のことよ。わしは阿弥陀仏の生まれ代りと思うておる。そう思うまでに尊いお上人だ」

守平は静かに盃をのみほすと言った。

「その御方が今日、土佐に流罪と決まった。

悲しい日じゃ」

「わたくしも、お名前はよう存じておりまする。専修念仏のことは、先頃から室ノ津にもみ教えが伝わっております。詳しいみ教えについては存じませぬが」

遊女は酌の手をやすめ、初老の男の顔を見

上げると、

「実はかねてより、殿方のお供をして上洛する折には、一度、吉水の御房に聴聞に参りたいと存じておりました。わらわごとき遊女も、み仏の来迎にあずかれるとか」

「そうよ。新しいみ教えじゃ。造寺造仏、学問を積んだり、身分高く生まれつくことが、往生の要件ではないと仰せなのだ」

「まことに有難いみ教えでございます」

「じゃが、それが南都や叡山のえらい憎しみに会われてのう。何しろ、南都や叡山は、われらごとき下役人や、そなたのごとき遊女、傀儡の相手はせぬ。それを法然さまは、われらごとき者こそが、弥陀仏来迎の正客じやと仰せ出された」

代官は手にした盃を膳の上に置くと、

「われらとて、み仏の詳しいみ教えについては知らぬ。だが考えてみるとおかしいではないか。学問、財宝なくしても心根の美しい者は、漁民農夫のなかにもおるのだ。それを、身分高く、智慧と財有する者に、往生を限る

とは納得できぬ」

代官はことばを切ると、灯影に白く浮かぶ遊女の顔をじっと見つめた。

「のう、そうではないか。あの源平の争乱では、身分高く財ある者でも、家を失い、親を亡くし、人買いに売られた者もおれば、遊女に身をおとした者もおる。群盗の頭目になった公家の女房もおるとは、よく聞く話だ。そうでもせねば、生きていけなかったのだ。み仏は、この者たちは見棄て、造寺造仏の富ある者だけを相手になされるのか」

「殿もござんじてございましょう。松菊は室ノ津第一の遊女でございしますが、この姉さまあねも元は平家の姫君とか。先の争乱で両親を亡くし、幼い頃よりわれらの長者宿で育てられた方でございます」

「そこよ。もしみ仏の心が、南都や叡山の言うようなものであれば、み仏の心とはいかにも小さいものではないか。み仏の心とは、そういうものではあるまいぞ。法然さまは、ただ、阿弥陀仏助け給え、の一心ぞ大切じやと

仰せなのだ」

「するとやはり、叡山のおさしがねて流罪の御処置をおうけになったのでございますか」

板戸のすきま風で紙燭がゆれ、風に乗って甘い花の香りが漂ってきた。

代官は梅菊の酌に盃をさし出しながら、

「それもあるう。叡山ではかねてから院に奏上していたというからな。しかしそこへもつてきて、去年の暮、院御所の女房が二人まで、法然さまのお弟子の手で出家してしまったのだ。御所の女房までも惑わせた、院はきついお怒りなのだ。そのお怒りが法然さまにまで及んだのよ」

「おいたわしいことでございます。お上人さまはもうお年であられましように」

「ふむ」

代官は深く呟くと

「明日、わしは生口荘に帰る前に、小松谷に赴いて、遠くからなりと法然さまのお姿を拝しにくるつもりだ。そなたも一緒に参るがよい」

(つづく)

今日では、「我慢」という言葉は一般にいい意味で用いられています。辛抱するという意味です。しかし本来は仏教語であり、あまり好ましい意味ではありません。

「我慢」とは、自己の中心に我があると考え、その我をよりどころとして心が驕慢であること、おのれをたのんで心のおごる煩惱。自らをたのむ慢心、七慢の一つ等と説明されています。

「七慢」というのは①劣った他人に対して自分が勝り、等しい

他人に対して自分は等しいと思う「慢」②等しい他人に対して自分が勝り、勝っている他人に対して自分は等しいと思う「過慢」③勝れた他人に対してさらに自分が勝ると思う「慢過慢」

④我あり、我が所有ありと執着しておごりたかぶる「我慢」⑤いまだ悟っていないのにもかかわらず、われは証得したとする「増上慢」⑥他人がはるかに優れているのに対して自分はわづかしが劣っていないという「卑慢」⑦悪行をなしても悪をたの

我慢

がまん

んでおごりたかぶる「邪慢」との七つの慢心です。

仏教では我われが自己の中心に存すると考える個性的、実体的「我」は実は虚構であり、固定的「我」すなわち「われ」という觀念や、「わがもの」という觀念は否定されるのです。仏教徒はこのような無我（非我）説を主張して、自己の中心に不変なる「我」なるものがあると考へ、それに執着するエゴイステックな感情や自己意識を「我慢」とよんで輕蔑したのです。

吉野法衣店

各大本山御用達浄土宗袈裟法衣専門



〒160 東京都新宿区南元町17
TEL 03-3355-2168
振替 東京2-176372

大室了皓師が答える

読者からの仏教相談

お墓をいま住んでいる土地に移したいのですが



九州から埼玉へ来て三十年、妻と子と暮らすサラリーマンです。故郷には老いた母がひとりで暮らしていましたが、それは何度もこちらで一緒に暮らそうともちかけたのに母は住み慣れた土地を離れられないと頑固に意地を張ったからです。その母が亡くなり、葬儀は九州で済ませましたが、向こうには親戚もなく寂しいものになりました。

お墓には父と祖父母が眠っていますが、そこに母を入れていいものかどうか悩んでいます。お墓をいま住んでいる埼玉に移したいのです。こちらには私や妻の親戚も多く、また

子供は全く九州のことを知りません。いまお骨は私の家にありますが、四十九日の納骨のことで頭がいっぱいです。

できれば、父や祖父母のお骨も一緒にこちらへ移したいのですが、そんなことはできないのでしょうか。同じ宗派のお寺でなくともいいのでしょうか。また九州の菩提寺にはどんな風にお話したらいいのでしょうか。

御住職は若いけれど物分かりのいい方なので、遠方の私たちに気をつかってくれましたが、祖先の住んだ土地を離れてしまうことにも抵抗があります。

私が住職をしている寺は東京都内ですが、昨年、お墓を福島の方へ移した檀家がありました。

八十年以上も檀家としておつき合いしていた都内居住の方です。

バブルが崩壊した結果、経済的に苦境に落ち込んだので、土地や住居を整理して田舎に転居しなければならなくなりました。ついにはお墓も田舎へ移したい。遠方ではお墓参りも儘なりません。

長い間ご住職と親しくさせて頂いて来ましたので、今まで通りお寺さんの檀家として勤めさせて頂きたいのですが、先のことを考えるとどうしたものかと迷ってしまいます。

と、相談されました。

私は、ご一家でお考えの上、良いようにされたら如何ですか。お寺に遠慮されることはありませんよ。

と、申し上げました。

そして東京を離れるのは辛い、と言いながら福島へ移って行かれました。

またその一方では、

秋田に移転することになりましたので、今までのように屢々お参りができませんが、東京には娘が結婚して住んでおりますし、息子も東京の会社に勤務していますので、子供達がお参りしてくれると思います。

ただ私も年ですので、いざと言う時のことを考えてしまいます。遠方の東京からご住職にお出で頂くのは申し訳ありませんので。

その時にはご相談頂ければ、お近くの浄土宗のお寺さんをご紹介して、私からもご依頼して差し上げますからご安心下さい。

とお答えしましたら、

「お戒名などはどうなるのですか」

「私がお付けし、先方のご住職にファックスでお送りしてお勤めして頂きます。それが出来ない時は、俗名でして頂き、納骨法要の際にお戒名をお授けしてご供養致します」

「それならば安心致しました」

と、秋田へおいでになりました。

三つ目は、貴方への直接的なお答になろう

かと思っています。

田舎から東京へお墓を移したいと言う方のことです。

私の寺にもおられます。

貴方と同じような悩みを持ってご相談に见えます。

おいでになるのは、全く縁の無い方ではなく、檀家の親戚とか親しい方が殆どです。

どこのお寺でも門戸は開いておられる筈ですが、知らないお寺へは遠慮されるからでしょう。

私は次のように申し上げます。

菩提寺のご住職に誠意を以てご相談しなさい。

一、遠方なので、

●お墓参りが疎かになってしまう。

●親戚も埼玉の近くにいたので、法事に遠方まで来てもらうのが気の毒だ。

また日帰りは出来ないのです、お出で頂いた方の宿の世話から宿泊費の負担も大きな出費となる。

二、九州へは帰る積もりは無いので、

●私が健在中は、何とかなるかも知れないが、子供の代になったらさぞ苦勞することだろう。

●長い間、ご住職には良くして頂いているので、お墓を移すのは辛いことだが今のうちに決断するのが親の責任ではないだろうか。

と、ご相談なされば、遠方の貴方にも氣を遣って下さるような優しいご住職ということですから、きっと快く応じて下さることと思います。

はなしが決まりましたら、引き上げる時には墓前でご供養の上、墓石の魂を抜いて頂き、墓石の整理をお願いするか、或は埼玉へお運びになったらどうでしょうか。

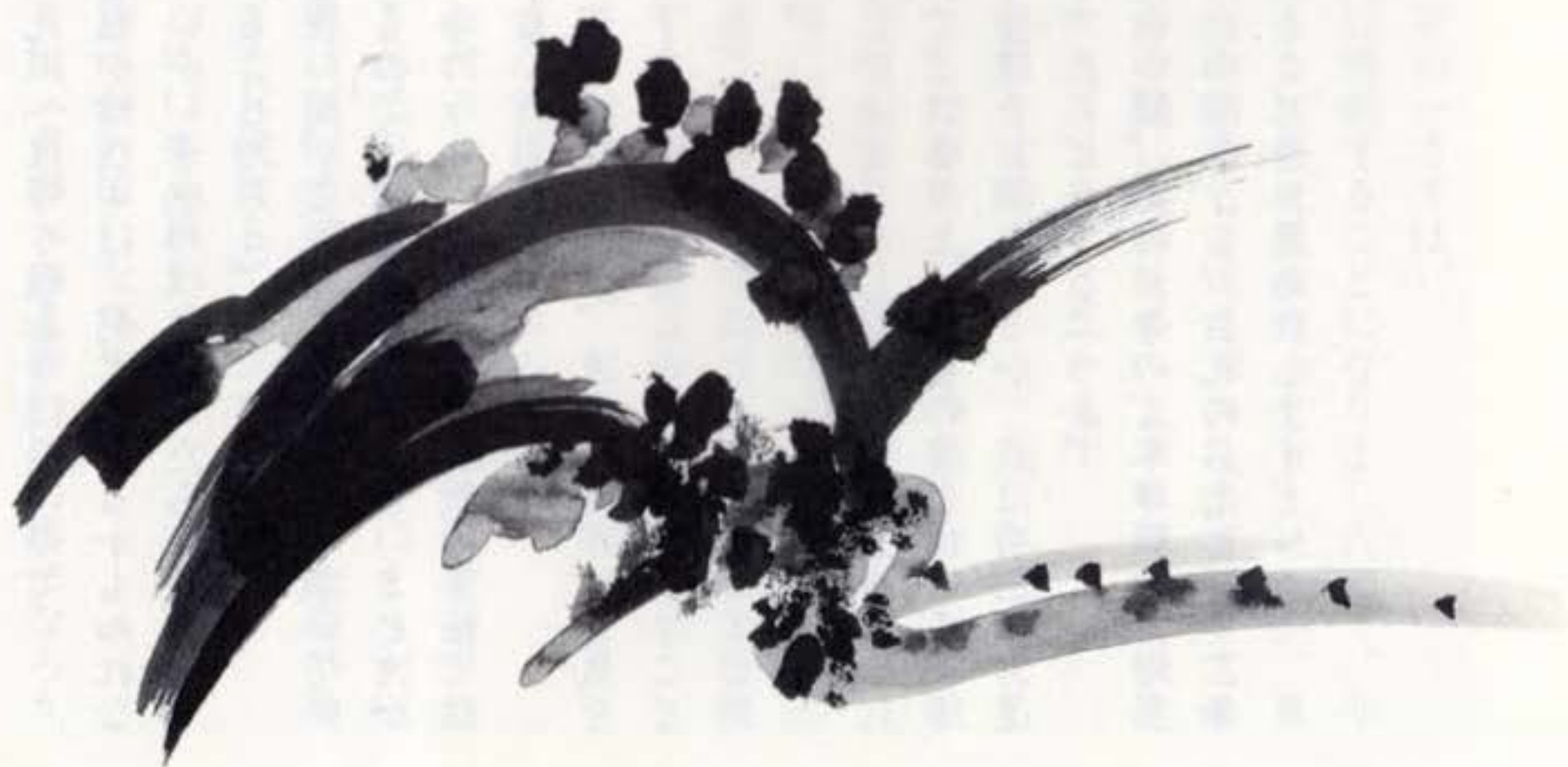
また長い間、そのお寺のご本尊様のお守りを頂いたのですから、お礼のお志としてご奉納されることをお薦め致します。

続

午後の日差しの中で

時の流れ

吉川英明



東京青梅市にある吉川英治記念館が、今年、開館二十周年を迎えた。

ありきたりの言い方だが、つくづく、早いものだと思う。

この記念館のある青梅市梅郷は、私達一家が太平洋戦争たけなわの昭和十九年に疎開し、その後十年間住んだ土地である。

そのころは、まだ西多摩郡吉野村と呼ばれていたが、越した時満五歳だった私にとっては、故郷とも言える場所なのだ。

父英治にとっても、横浜の生家を除けば、最も永く腰を据えていた場所であり、終戦とそれに伴う擱筆、そして『新・平家物語』の連載開始など、様々な思い出の残る土地であった筈である。

だが、昭和二十八年に東京へ戻ってから、三十七年に七十歳で他界するまで、父は一度か二度しか青梅を訪れていない。

多忙だったせいでもあり、そのころはまだ青梅への交通が今より不便だったせいでもあろう。

こう書いてきて、私は、父が東京に戻ってから九年しか生きていなかったということに改めて思い至り、はっと胸を衝かれた。私の感覚では、もっとずっと永い時間が過ぎたように思っていたからである。

一家が東京へ戻った時、私は中学三年生だった。そして父が死んだ三十七年には、私は大学を卒業して一年半、駆け出しながら歴とした社会人になっていた。

確かに九年間なのだが、中学生が社会人になるまでの九年間は、五十歳を越えて振り返れば、誰もが溜め息をつきたくなるほどの永さを持っている。

だから、父の晩年の九年間の持つ永さを、中学生だった私の感覚の尺度で推し量って物を言うのは、大きなずれがあるということに、今更ながら気がついた。

我が身を省みても、直近の九年間は、いかに速く過ぎてしまったことだろう。時の流れというものは、年齢に正比例して速くなるものなのだ。

もう、二十年以上も前、父の十三回忌の年のことだったが、私は『父・吉川英治』という本を書いた。

その時にも、私の幼いころから父が死ぬまでの色々な出来事を思い返しながら文章を綴っている、それを書いている時点に近づけば近づくほど、時の流れが速くなるという感覚に不思議な思いをしたものだった。

だが、それも今ほどのことはなかった。まだ三十代だったそのころの私にとっては、時は今よりも余程ゆっくりと流れていたから、晩年の父の時間の速さも、それほど切実に響いてはこなかったのだ。

開館二十周年の記念日は、三月二十三日の日曜日だった。寒の戻りに朝からの小雨が重なって、吉野村は真冬を思わせる寒さだった。今年は早めに咲き始め、そろそろ盛りを過ぎかけていた梅の花も、戻ってきた寒さに命を永らえたのだろう。灰色の霧雨の中にしっとりと雪洞のような光を添えている。

春は目まぐるしく天気が変わる。二十年前

の開館当日は、これほど寒くなかった記憶がある。

それもついこの間のことのような気がするのだが、五十三年前、ここに越してきた五歳の春となると、記憶の限界の境目辺りに断片的に浮かんでいる映像があるだけで、確とした手応えに乏しい。

それでも、庭の樹齢数百年という椎の巨木や母屋の切妻を仰ぎ見ていると、ぼんやりとした映像の断片もその数を増して、あるものはその後の確かな記憶に繋がってくる。

「今いるこの部屋の辺りは、越してきたばかりのころには、風呂場だったんですよ」

昼酒にちびちびと口をつけながら、記念日のお祝いに駆けつけて下さった客人達に往時の家の様子を話していると、また新たな記憶が甦る。

そう、その風呂は大きな五右衛門風呂だった。湯殿も大きく暗く、早熟で父の『宮本武蔵』も既に読んでいた私は、武蔵がお杉のたまし討ちに遭った本位田家の風呂場はこんな



イラスト・平野 稔

感じだったのでは……などと想像して胸を踊らせたりしたものだ。だった。

五右衛門風呂といつても、もう知らない人が多いだろう。

釜茹での刑にされたという大盗賊の石川五右衛門にその名の由来がある通り、風呂桶が鉄で出来ていて、表の焚き口から風呂桶の真下に薪を抛り込んで湯を沸かす。当然、風呂桶の底は熱くなるから、大きな木の板を一枚敷いて入浴するのだが、その板は人が入らない時は、風呂桶の蓋代わりに湯船に浮いている。

風呂に入る時には、その板を沈めてその上に乗っていないければならないわけだが、風呂桶そのものが今の家庭用の浴槽の優に倍はあろうかという大きさだから、板もちよつとした筏のように私には見えた。大人の重さがないと板が沈まない。子供たちだけでお風呂に入ると、板がひっくり返って大火傷しますよと、日頃から嚴重に注意されている風呂だった。

だから僕らは、必ず誰か大人と一緒に湯殿に入り、その人が板を沈めて湯船に座り込むのを待って初めて湯に入るのを許された。

「子供は待ってなさい、危ないから……」

などと、始めは偉そうな口を利いて裸になった大人達も、そのうち、大きな浮力のある板を水平に保ちつつ湯船の底に沈めるという慣れない作業に手子摺って、慌てだすのがおかしかった。

一度、死んだ叔母と一緒に風呂に入った時、小柄な叔母では中々板が沈まず、とうとう溪流下りの船頭よろしく、裸のまま板の上に仁王立ちになって、両手でバランスを取りながら板を沈めていったことがあった。そのあられもない姿は幼児の目にも強烈で、笑っては悪いような気がしていつものように笑い転げられなかったのを思い出す。

「この玄関は裏口まで抜けた土間でした。裏口にはへっついがあつて、その脇が水屋でした」

突然脳裏に浮かんだ叔母の姿に、込み上げ

てくる笑いを一所懸命噛み殺して、私は話し続けた。

「土間に面して茶の間があつて、真ん中には大きな囲炉裏がありました」

囲炉裏というのも都会生まれの私には珍しかったし楽しかった。何しろ、家の中で焚き火が出来るのだ。

話していると、連想が次々に記憶を呼び覚ます。そう、らっきょうを漬け込んだ大きな醤油の空き樽を、ごろごろ転がしたのもこの土間だった。転がせば転がすほど、らっきょうがおいしく漬かるということで、樽を蹴飛ばして転がすのは僕らの役目だった。漬け物の樽を蹴飛ばすという、普通は叱られそうな遊びを公然と出来るのが嬉しくて、暇さえあれば、ごろごろとやっていた。

そんな典型的な農家の造りを、やはり使いづらいつと改築したのはいつ頃のことだったろうか……誰も正確には覚えていないんですという私の言葉に、正面に座っていた朝日新聞社OBの大塚光幸氏が、ヒントをくれた。

「僕が初めて伺った時には、もう今のこの部屋がありましたよ」

大塚氏は当時『週刊朝日』の編集部に入っていたのだ。『週刊朝日』に『新・平家物語』の連載が始まったのが昭和二十五年……ということは、その前年の二十四年ごろまでにはもう改築が済んでいたことになる。

「先生はいつもそこに座られてね……編集長だった扇谷正造さんや私たち……そうだが、時々、文春の池島新平さんなんかもしましたなあ。みんなてよくお酒をいただいた」

大塚氏は、懐かしそうに部屋を見回す。

私も、各社の編集者が父を囲んで酒を飲んでいたこの部屋の光景ははつきりと覚えていゑる。中には、かなりの酒乱もいたが、大塚氏は、父が各社の編集者中随一と折り紙をつけた酒豪である。

しかし、あのころこの部屋で父を囲んでいた方々も、もうそのあらかたはこの世にない。私がそのことを言うと、大塚氏が、誰某と何人もの故人の名前を上げられ、ひとしきり

昔話に花が咲いた。

「お別れの会が、も懐かしいですね」

大塚氏が目を細める。

昭和二十八年、父は東京へ戻るに当たって、九年間一緒に暮らした村の人々を家に招んだ。村の人々五、六十人の他にも近くの沢井から河合玉堂画伯がいらしたし、名古屋からは『新・平家』の挿絵をお描きいただいた杉本健吉画伯という遠来のお客もあった。

庭にテントを張り、朝日新聞社が提供してくれた生ビールに皆喉を鳴らした。当時生ビールは貴重品で、生まれて初めて飲むという人も少なくなかった。

「でも、あの時は失敗しましたよ。僕は生ビールの運搬役を買って出ましてね……」

大塚氏がぐい飲み酒をすつと飲み干して、その時のことを振り返る。

「東京からトラックの荷台に生ビールの大樽

を積み込んで、僕も荷台に乗ったんです」

初めはよかったが、都内を離れるとまだ未舗装の道が多く、トラックの荷台に縛り付けてあるビヤ樽が勝手に踊る。

「大事なビールに万一のことがあってはと、二時間以上、必死でビヤ樽を抑えていました。こっちへ着いたら、くたくたですよ」

いかにも酒豪の大塚氏らしい話だと、どつと座が湧いた。

多摩川の溪流沿いに細長く伸びている吉野村には、西側から山が迫っている。雨の日は殊に暮れるのが早い。

そろそろ、記念館二十年目の一日も終わりがだなど窓を明けたら、静かに霧のような雨が吹き込んできた。

濡れた木々は、もう夕闇に包まれていた。

(了)

「ウソをつくんじゃない。ウソつきはどろぼうの始まりだ」

幼いころ、何か悪いことをして言い逃れようとする小生に、父はよくこう言ってしかった。

だから、親となつたいま、子供たちが同じようなことを言つたとき、小生も父と同じように言うことにしている。なぜなら、父の言ったことが正しいと思うからだ。

しかし、最近困っている。国会での証人や参考人に対する質問への答え方、また今回の原子

力発電所事故に対する動燃の対応。いやいやこればかりではない。一流企業のスキャンダルなどでも、正直さは微塵も見えない。しかもこうした人たちのほとんどが社会的地位の高い方々である。

あんたら、何を考えているんですか。ふざけちゃいけませんよ。

あなたたちのことが新聞に書かれるたびに、全国の親は子供に「ウソをつくな。正しいことをしろ。立派な人間になれ」と

⑧ しろに減加いい

言えなくなってくるんです。どうしてくれるんですか。それとも、「ああいう人みたいになつてはだめだ」という見本にでもなってくれているとでも言うのですか。

そういえば、父はよくこうも言っていた。

「まちがいはだれにでもある。それをどう補うかに人間の価値がある。人間としての誇りをいつも持っていなさい」と。

京都一千年の歴史に

育まれた巧みの技

京仏壇・佛具は当店に!!

☎六一五 京都市右京区

西京極郡町一〇三番地三

(株)島津法衣佛具店

☎〇七五―三一四―七七六八

FAX 〇七五―三一五―三七五三

うまい野菜と



料理の話⑥

あるいは

セ
ッ
ツ
エ
ー
バ
タ
ケ

自家菜園

の

ひそかな

愉しみ

我田大

私の住んでいるところは新潟県南魚沼郡S沢町で、まあ世に名高い、値の高い「魚沼コシヒカリ」が穫れるところですよ。日本全国的には「新潟コシ」その中でも「魚沼コシ」といわれますが、魚沼に來れば、でも「S沢コシ」といわれることが多い。まあ生産農家はどこでもお国自慢というか、自分がいっちメゴイ（かわいい）というかで、自分のところが日本一うまい米の生産地だ、といったがるわけですが。

S沢のコシヒカリは、数年前に世間を騒がせたコシヒカリニセ米袋事件で一挙に有名になった。袋には実在のS沢町の農家数件の住所氏名が記してあったというのだ。これで、ヤミ米業者もコロリとだまされた。そして、ほんとうにうまい米のとれるのはどこかを知っているはずのヤミ米業界でお墨付きを得ているのは「S沢」だということが（うまい形で）世間にバレた。タナボタで、一番効果的な広告をしてもらったようなもの。S沢はこの宣伝効果にたいしてヤミ米業者に感謝状を

やってもいい、と密かにささやかれた。実はS沢の宣伝のための仕掛けだった、と、これはまあ冗談だけれど。

もとへ。新潟—魚沼—S沢 というように、「中でもうまいコシ」の範囲がどんどん狭くなってくる話だった。つまり、こんどはS沢の「中でも」。S沢を南北に貫流しているのがU野川、それを境に東西に分ければ、西側がうまい、と話は続いていく。理由は土質、水質、西日があたらずなことなどという。次に、西側にいくつかならんでいる集落の「中でも」O沢というムラがうまい。さらにそのムラの土地の「中でも」Tという場所。と、このあたりまで「中でも」の例をたどってくることはできます。さすがに田んぼの一枚一枚にまでは至らないのですが。

……とはいえ、そんなに厳密な話じゃないから、一ランク下のうまいところと、その上のランクのまずいところを比べたらどうかなどとは考えられていない。でも食味の傾向としては人を頷かせるものがある。

あいまいな、傾向というほどのことを言いあらわす時、次々に中を分けてこつちがいいとする、このような「中でも思考」でするのは面白いことです。これは人間が意識して考える以前に考えられていること、話が進んでいくようにあらかじめ敷かれたレールみたいなのがあるから、という気がしませんか。

ずっと昔、子供の頃にきいたNHKラジオのクイズ（「二〇の扉」だったか）で、なんだかわからないものを当ててるのに「それは生物か、無生物か」をきいて、生物といわれたら「動物か植物か」をきく、次に……というように範囲をどんどん狭めていくやり方とも似ている。

本人は自由に考えていると思っけていても、けつこう敷かれたレールにのつて考へていることつてあるのじやないか。それはいつの頃からか。人類が言葉を得てからか。

相手の発する言葉を聞くと自分の中にあらかじめ敷設してある、その言葉関連の線路網が励起され、言葉列車はその線路を選んで走

つていくに過ぎないというような気がする。相手の中にも似たりよつたりの線路網があつて、したがつてコミュニケーションが成立するのだとも。

線路網は文法のことだといえぱ片付きそうですが、文法は学者が再構成したもので「文法自身」ではない。線路網は無学な人でもしぜんと身につけている。身につけられる、ところがちがつている。

上の、「中でも式」でも、それが続く話のリズム感を共有することは線路の継ぎ目のガツタンゴツトンのようなもので、こういうことが線路敷設の一つなので、文法で理解することではない……とかなんとか、なんだか話がアヤフヤになつてきた、のでやめる。

ここいらでとれるコシヒカリはうまいからそれについて書こうかなと、あてもなく始めたのですが、早くも一本目の道は行き止まりにきた。道なきヤブには突入しないで、再スタートする。

こんな「日本一」の米どころに生まれ、毎

日そのうまい米を食って育った私ですが、高校を出て上京しました。そして食った東京の米が、すごくまずいとは思わなかった。貧乏で腹を空かしてばかりいたから、何を食ってもうまかったのか。今考えればそこには結構味の段差があったはずなのですが「あこがれの」東京に出て、初めての一人暮らしで、米の食味なんかどうでもよかったのだろう。食えればそれでいい、レベルになれば味に客観的になれるはずありません。また、好きな人と一緒とか、うれしい時の食事だっという感じで

す。今、うまい米をうまい米をと日本中で言っているのは、全国民が味に客観的になれる精神を持った時代なのでしょう、か。と、それはともかく、十数年東京付近でふつうの米を食っていましたが、とくに米の味がどうこうとは思わなかった。それが再び田舎に帰ってきた当初は「わ、ちがう。すげー」とか思いました。味に自覚的な板前という職業人になっていたせいもあったか。そう、味に自覚的、と言えば、周囲に板

古き伝統技 三代にわたる信頼

有限
会社

浄土宗法衣専門

古島法衣店

〒111東京都台東区元浅草4の2の1

電話(03)3842-11289

振替00180-2-45231

前とかコックとか食い物作りを職業にしている人がいて、食事を一緒にする機会があったら観察してみるといいことがあります。

そういう人々は、口に食べ物を入れるとフツと動作を止め遠くを見るような目付きをします、一瞬のことだけど。味を見ているのです。

私も、もちろんしています。ある時女の人に見つかり「やーねー」とか言われて自覚した。けれど、体にしみついているからやめることはできない。職業病。「しよーがねーだろー」と、ほっておくしかない。

料理人同士で会食をした時に、こっそり見ていたら、みんなが同じタイミングで、あの遠くを見るような目付きをした。我もながら、やはりおかしかった。素直にうまいと言えなくなる職業。過去の経験によって自分の中にかたちづくられている味の世界、そのどこにその味があたるか、直ちに座標を確定しようとするのだ。新らしい、うまい、と思う味もすぐさま、その世界に位置を与えられて

しまう不幸。もう、ときめく、自分を見失うようなうまさはないので。

と、また道草書きをしてしまった。家のK沢（さっきのO沢の隣ムラです）コシヒカリだった。炊きたて。その香り。飯粒が透明で輝き、口に入ればスベスベ、噛めば、モチモチ。しかもすっきりしたうまみがある。冷めてもこのモチモチは持続してニギリメシもうまい。

で、東京的日常マンマは、ありや一体なんだったんだ、ということになった。こんなおかずもいらないうような米があっただ、と。それからずっと毎日、自家産K沢コシヒカリを食べ続けています。毎日、日本一（の隣）です。おそれ多いことです。でもそうになると、うまいのがあたりまえになって、もうとくにうまいと思って食っていないのです。たとえばよくないのですが、いやな匂いでもしばらくすると慣れてしまうようなものでしょうか。ただの飯です。有難さのわからぬ、神仏をもおそれぬ行為というべきでしょう。あまつさ

え、新米は粘り気が減ったのがいい、などと生意気を言ったりもします。増長していると
いわれてもしかたがありません。

しかし、例えばこのすばらしい味に（残念ながら）慣れてしまうこととか、さっきの味世界の版図を広げ続ける行為なしには、比較することや関連づけることのできない、ただ独立したうまいが並び立っているだけという状態にとどまることになります。料理人はそ

れじゃ困るのです。食えても作れない。

料理人はどうしてか、うまいものをうまく感じないような方向に自分をもっていってしまいう性向がある、因果な職業だ。

それは言葉を覚えるように見よう見まねで身につけられたのです。ここにも「中でも式」のように見えない線路網みたいなものがある、と言わないわけにはいきません。

■伝承の技と心

念珠



念珠の修理・仕立替承ります。

○アクセサリーの修理・加工・リフォームも承ります。

◆カタログをご請求下さい。
「念珠年報」をお届け致します。



平野屋

本店 東京都文京区湯島4-5-3

☎(03)3811-4450 〒113

四谷店 東京都新宿区四谷2-8

☎(03)3355-2250 〒160

J-news

97年度H氏賞受賞 詩集「うしろめた屋」
詩人 山田隆昭氏に聞く

既に朝日新聞「ひと」欄などにおいて御承知の方もいらつしやるだろうが、詩における芥川賞といわれる日氏賞の97年度受賞詩集は山田隆昭氏の『うしろめた屋』（土曜美術出版販売 21世紀詩人叢書30）に決まった。山田隆昭氏は浄土宗東京教区江東組、正源寺の副住職。東京都福祉局に勤める公務員でもある。「ところで日氏賞って何ですか、と聞かれることが一番多いんです」

受賞決定の後、思わぬ取材の嵐に巻き込まれ。超多忙の身となった山田氏は、笑いながらこう語った。

日氏賞とは、かつて詩人、志半ばにして実業の世界に入ったが、振り返って、詩人の育成のために、と匿名の基金を作った奇特な人物のイニシャル。詩集『うしろめた屋』の丸山勝久氏解説のタイトルは奇しくも「含羞の遍路——山田隆昭」だが、昔から詩はまさに含羞の世界にある。

屋台の椅子は低いほうがよい
地べたに這いつくばるようにして
コップ酒を吞んでいると
植え込みから幽かに虫の息がきこえてくる
もっと低く もっと低く
屋台の客はみな
斜め前方に傾いて酒を吞んでいる

（「路地」）

たとえば、詩集巻頭の詩は、こんな風に始まる。現代詩というとな難解でとっつきにくい、観念的でひとりよがりだ、という風に敬遠されるむきもあるだろうが、ここにあるのは、よく吟味はされているが、むしろ平明、具体を重視した言葉の群である。市井の男たちの酒の呑み方がその姿勢や角度で示され、そんな詩人の発見によって下町の暗い路地の屋台が不意にクローズアップされてくる。

この店のあわただしさは

お産の現場に似ている

ふんだんな水と

湯気がたちこめるなか

新生児の

あるいはおんなの肌のような

食べてしまいたいほどいとおしい

きぬごしどうふが

つつましやかに産まれてくる

（「とうふ屋」）

あるいは、下町の朝。路地の豆腐屋のなん

でもない日常から立ち上がるイメージの豊饒

さはどうだ。「さかな屋」から「ふとん屋」へ。

そして豆腐屋、床屋、香具師へと続く詩人の、

視線と想念の跳ね方はまるで石蹴りのように

路地を巡る。

ことさら意地悪に見る、のではない。都会

的なエスプリや洒脱、とも違う。解説の丸山

勝久氏はブラック・ユーモアすれすれの綱渡

りと評したが、むしろオーソドックスで精緻な諧謔は東京の下町への一種の偏愛を担保にして、狩り出され運用されているようだ。特に「××屋」の題名の並び順の可笑しさは、この詩人の構成センスの良さを感じさせる。「タイトルを決めずに出版社に原稿を渡したんです。それじゃダメだといわれて、『うしろめた屋』にしました」

人間は、うしろめたい存在。傲慢であり、何かの権威を背負っていなければ生きづらい生きもの——という説明以上に、ただ素直に面白い。このタイトルの秀逸さが、この詩集の完成度をさらに高めた。

福祉畑にあつては、あえて山谷地区を担当し日雇労働者と長くつきあったという。

加えて、寺院に生まれ育った人間が必然的に体得する死生観。無常、縁起の理を深く理解してもなお割り切れぬものへの苛立ち。

在家的な理解ならば、こうした筋道の解析で事足りるかもしれないが、どっこい、この詩人はもっと可逆的な、複眼的な厄介さを内

側に抱えている。

それは、ある意味で現在の都市寺院の僧侶及びその後継者全員が抱えている問題でもあるが、この場はそれを語るべきスペースではない。

むしろ、ここで強調すべきは、その詩作にも似て静かな彼の語り口のことであり、東京人特有の、感じのいいはにかみ、自己抑制のことであるべきだろう。

十代後半より詩と正面から向きあってきた並々ならぬ精進がそれらを結実させたのだとすれば、その柔らかな時間に深く敬意を表したい。

ともあれ、浄土宗にとって誇りとするべき輝かしい星がまたひとつ誕生した。

詩集『うしろめた屋』。

教師、寺族、檀信徒、必読の一冊である。

山田隆昭（やまだ・たかあき）
一九四九年 東京生まれ
詩集『風のゆくえ』『鬼』
詩誌『花』『地平線』『展』同人
現住所 千135東京都江東区永代一・八・八



21世紀詩人叢書30『うしろめた屋』
土曜美術社出版販売
千135東京都新宿区西早稲田三・三・一八
電話〇三（五二八五）〇七三〇
定価一九〇〇円



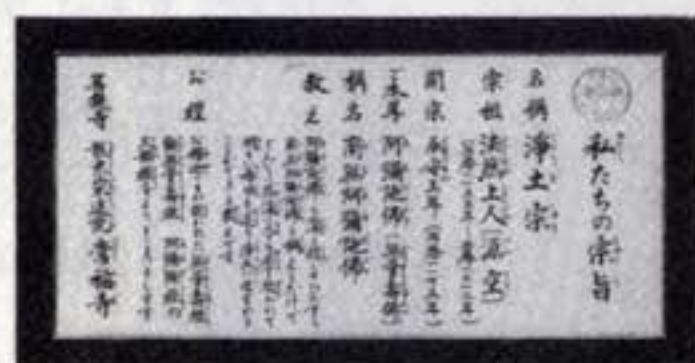
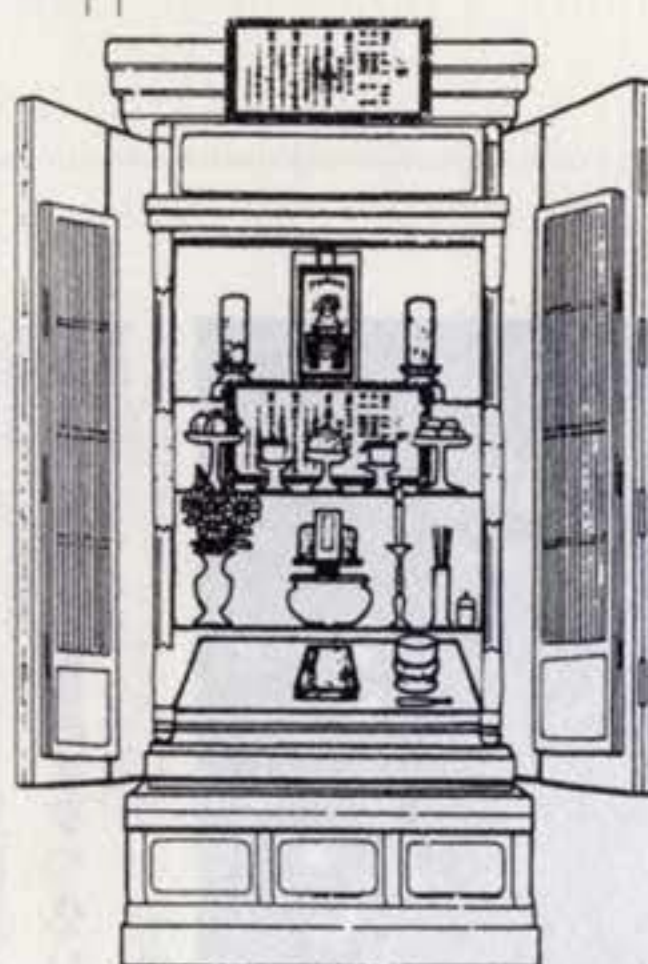
好評
発売中!!

お寺から檀信徒へ

宗旨布教額

家の仏壇の上に掛けるものです。
菩提寺とその宗旨がいつも
ひと目で明確になります。

数をまとめて御注文下さい。



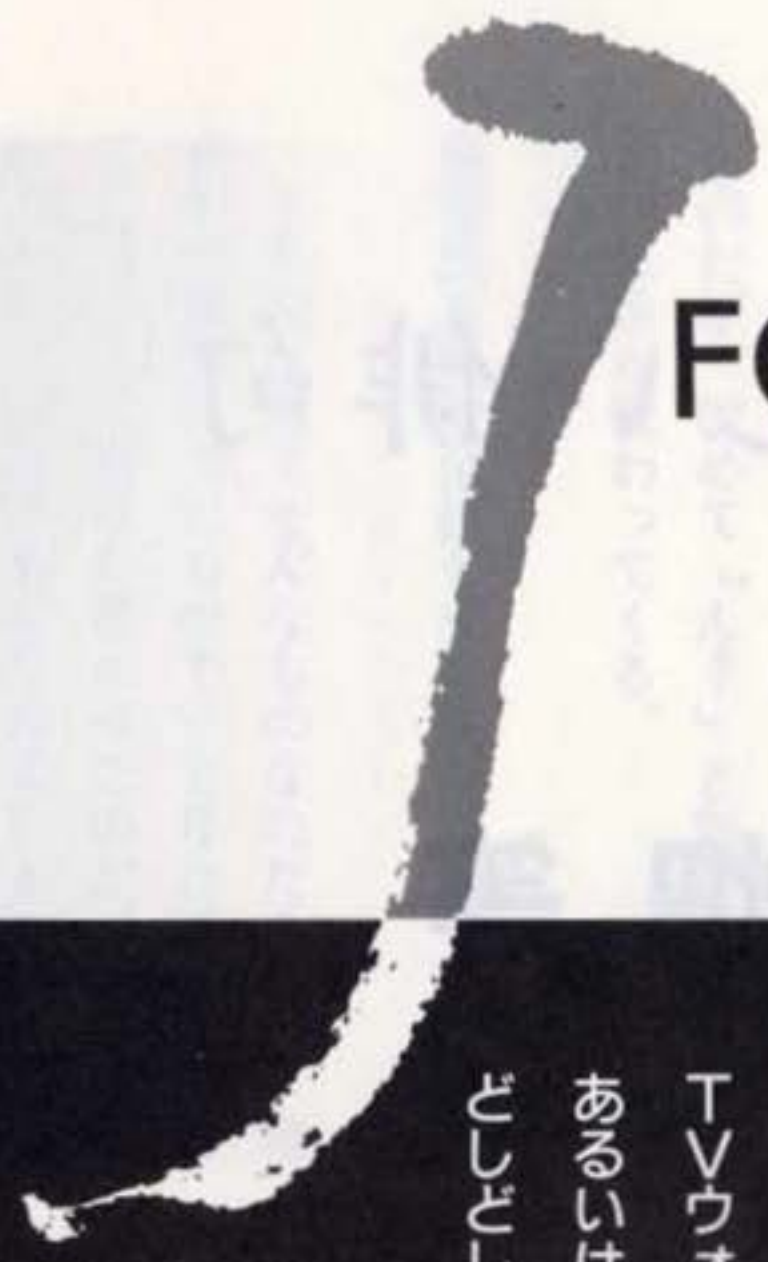
定価：大（32.0×18.3cm）721円／小（27.3×14.2cm）412円

注文・問合せは

法然上人鑽仰会

〒105 東京都港区芝公園4-7-4明照会館内

電話：03-3578-6947／FAX：03-3578-7036



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では読者の自由な参加をお待ちしています。
詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、
TVウォッチング、紀行文その他創作等。
あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。
どしどし編集部にお寄せ下さい。

おかしい俳句

大畑 等

元漫画トリオのメンバーで現在大阪府知事の横山ノック氏が、笑いというのは面白いのはまだダメでおかしいのが一番なのです、と言っていた。ここらへんのニュアンスを私なりに解釈してみると、作った笑いはだめですよ、体からにじみでてくるようなのでなければ本当の笑いではないのですよ、ということなのだろう。そういう俳句をとりあげて楽しんでみようと思う。

大寒や見舞いに行けば死んでおり

虚子

これはありそうな話だ。私にも、手紙を出せば死んでおり、という体験はあった。なにも手を加えず、事実だけをボーンと出しているだけに、身に詰まされない者にとっては、あっけらかんとしたおかしさが伝わってくる。大寒という季語も事実をそのまま受けとめる乾いた抒情にびったり。「見舞いに行けば死んでおり」のどうしようもなさ、俳句にする

と、おかしくなる。虚子翁は、ぱっと浮かんだまま作ったと想像しておこう。

柿食へば種のなかりし入日かな

楸頓

品種改良で果物から種が無くなっていく。驚きもなくなつて久しいのだが、あるものがないと、ふっと虚しくなるときがある。下五の「入日かな」でその虚しさが茫洋としてくるのだが、改めて「ん？」と気づいたときのおかしさが伝わってくる。

涅槃図を外せば釘もすぐ抜かる

登四郎

まあ釘なんてそんなものなのだろうが、相手が涅槃図だったもので、とりたてて詠まれてしまった。相手が悪かったのだ。その釘はどこかに、ぼいと捨てられてしまったのだろうか。ごく日常の為せる業であるが、人の行為を見るよりも、もののありように焦点を合

わせた。そこから間接的に人間の行為が見えてくるところが、おかしいのだろう。

縄とびの端もたさるる遅日かな

聞石

こちらの端は作者がもっているのだが、さてもう一方の端は誰がもっているのだろうか？ 実は、一方の端には春の夕暮れがあつて、たった一人の出来事のような雰囲気をもしだしている。怖さも感じる。と同時に「もたさるる」という受動態と「かな」で結んでいるところにヌーボーとしたおかしさがにじみ出ていると思う。

ひとつ食うてすべての柿を食い終わる 聞石

なにかすつとぼけた味がする句である。「すべての柿」という大げさな表現が、俳句という最小の定型詩のなかで利いているし、食い終わってまったく無くなってしまったからこ

そ「すべて」が立ち現れてくる、ということなのだろう。どういふことはないのだろうが、なにかがあるという俳句である。説明をつけようとすればするほど野暮ったくなるようなので、読んで楽しむ、それで終わりとしたほうが無難なようだ。

死にたれば人来て大根煮きはじむ

塊太

この句をおかしいと言ってしまったていいのかどうか、ちよつと躊躇する。葬儀という儀式と並行して、お通夜の飲食の準備がそそくさで行われる。忙しいのだ。死者にとって、馴染みのものが大根を煮きはじめる。死者の表情は如何に。昨今の、病院で死に、業者まかせの儀式で逝くよりもはるかに温みがある。

「人来て大根煮きはじむ」という事実が「死」と拮抗していて、人の生死のなかに強さを感じ、おかしさを感じ、悠々としてきたから不思議だ。

汽車よりも汽船長生き春の沖

敏雄

確かに汽車は電化されて元の源初的な機械とはかけ離れてしまい、いまや電車という滑らかな乗り物となってしまった。一方、汽船は、まだまだ元の形を保って海に浮かんでいる、という事なのだろう。それにしても、作者はこれらの人工物に「長生き」という言葉を冠したのだから、アレレとはぐらかされてしまったのだ。そして下五は季語中の季語である「春の沖」だから、私は十七文字のなかで目を廻された思いである。このような俳句に深く突っ込んでも無駄なようだ。入り口も出口も無い。薄板界の大人の童話とでも言つて、楽しんでいよう。

さて私の仲間の句で、おかし味のある（と思う）俳句を披歴してみます。○×を付けて楽しんで下さい。

つくしたんぼほ食って一日善為さず

仁

臆病がいつもの勝ちて唐辛子

裕

全員が寝ている電車文化の日

亜子

ぞう煮お節お節ぞう煮お節すき焼

あずさ

刈田から株式会社生えてくる

菊野

夏果てぬ胴体ばかりのフランスパン

等

てんと虫机の意味がわからない

通太

蟻穴を出て見おぼえのない財布

哲郎

快適な環境を創造する

in 鹿島

KAJIMA CORPORATION

代表取締役社長 梅田 貞夫

本社 ● 東京都港区元赤坂1丁目2番7号

電話 ● 東京03(3404)3311(代)

初夏

誌上俳壇

眈に紅さす鏡春祭

幟り立つ空のさざなみ春祭

おむかひは一姫二太郎初幟

たたまれて安らひにゐる鯉幟

老犬の自由にまかす芽吹きかな

芽柳や水たうたうと海野宿

図書館に畳の間あり青葉風

「円月」も「渡月」もありて橋涼し

児玉仁良

(埼玉県入間市)

内堀綾子

(東京都小平市)

どの道を曲がるも花の道となる

水無しの池も大降り花筏

竹の子の離れて遠き親の竹

やふやふに椅子一つ空き牡丹苑

松本厚子
(東京都町田市)

花種のいのち眠らす紙袋

金婚の庭くれないの冬薔薇

佐藤みつ江
(群馬県高崎市)

北窓を開きて友の死偲びおり

打留めの札所離る、花の雨

佐藤雅子
(山形県上山市)

とべさうな小さき流れ蝌蚪生るる

「月影の」校歌き、をり花万朶

吉田ゆきゑ
東京都江戸川区

4 5 月合併号の吉田ゆきゑさんの投句中「十六弟子」とあるのは「十大弟子」の誤りでした。吉田さん申し訳ありませんでした。十六は羅漢ですよ。仏弟子として恥ずかしい限りです。正しくは、

釈迦堂の十大弟子像馬酔木咲く

となります。謹んで訂正させていただきます。合掌。(編集部)

平成 新訂 諷 誦 撰

待望の回向文集、諷誦文集ができました！

『新諷誦撰』刊行から十一年。

今ここに、『諷誦撰』が生まれ変わりました。

新作、口語調など多数加わり、

従来の文章も整理して、

より一層充実した諷誦撰ができました。



上製・布クロス貼り

定価2,700円（税・送料込）

◇内容を再吟味。回向文とは何かから考えました。

◇サイズは従来通り、持ち運びに便利な大きさ。

（タテ一九センチ、ヨコ八センチ）

◇総ルビ付。

監修 大室了皓／大谷寿雄／山本康彦
編集 ふじゅせん刊行会 代表・長谷川岱潤

お申し
込み先

ふじゅせん刊行会

〒141東京都品川区上大崎1-9-11（戒法寺内）

TEL:03-3441-8971 FAX:03-3441-8702

郵便振替0015-8-158563 ふじゅせん刊行会

事務局便り

事務局便り

●J・FORUM（浄土フォーラム）

ご好評を頂いております、皆様のためのコーナー（J・FORUM）。毎月、投句、投稿を頂いておりますが、編集部ではもっとももっとたくさんの作品を、お待ちしております。短歌や俳句、書評随筆や詩、身近な出来事や情報など、先の要領でほとんどご応募ください。私たち編集部では、読者の皆さんと一緒に、この「浄土」をより楽しく、すばらしいものにしていきたいと考えております。

- 1 随筆・歌など……四百字詰め原稿用紙十枚以内
- 2 俳句・短歌・川柳など……四首まで
- 3 その他、本誌の体裁や掲載記事に対するご意見やご感想など、何なりと気軽にお聞かせ下さい。

……適宜

タイトルは自由です。投稿は随時受け付けておりますが、採否に関しては編集部にご一任下さい。また、原稿は返却いたしませんので必ずコピーをおとりの上お送り下さい。採用分については記念品を進呈いたします。

●読者アンケートのお願い

編集部では「浄土」のより一層の充実を図るために、皆様にアンケートをお願いしております。

1 六月号でもっともよかった記事。

2 今後、掲載してもらいたい記事、希望する内容。

3 法然上人讃仰会の活動として望むこと。

4 その他。ご意見、ご感想など。官製はがきまたはFAXで事務局までお送り下さい。もれなく記念品を差し上げます。どうぞご協力お願いします。

（住所、氏名、電話番号をお忘れなく）

●新規会員紹介（敬称略、順不同）

一般会員

静岡 東遠組 相伝寺

東京 浅草組 法林寺

購読会員

埼玉 第一組 浄相院

岩手 紫波郡 前田文夫

神奈川 港北組 泉澤寺

京都 中京 同朋出版



惜別の心さまよう春の暮

岱潤

国会で脳死を人の死とする法案が、衆議院を通過した。臓器移植を待つ人々にとっては、待ち望んだ法案の可決であつた事だろう。しかし、こうした形で本当に良かったのだろうかという疑問は、多くの宗教者の中に根強く残っている。

いかなるいのちも尊厳なるいのちであり、死にゆくことへの平等性を考えたとき、法律で死を決めることの傲慢さが恐怖感となつて感じられる。

家族に脳死者を持った人の話を聞いた。息子の突然の事故による脳死状態を前にしたとき、その事実を受け入れるまでにはどうしても時間が必要だつたと言う。誰もが助かりたい、助けたい「いのち」なのであり、助からなくていい、助けなくてよい「いのち」などないからだ。選択権があるとはいへ、残された家族にとつて、法律が脅迫になりはしないか、心配でならない。

四月十九日、浄土宗の經典・法然上人の著述などの和訳、解説の本を十二冊も自費出版され、戦前の十五年から、戦後の長きにわたり、本誌の編集をおつとめいただき、本誌とはきつてもきれない大恩人の村瀬秀雄上人が、八十八歳でお浄土にお還りになられた。最近はずっと病床にあられたとのことで、静かな最期であつたとのこと。この場をお借りして深く哀悼の意を捧げたい。

若葉の緑が映え、生命の躍動感を感じさせる季節も、一方で咲き誇りし花々が散りゆき、海上には卯波立つ季節でもある。人それぞれ、さまざまな死を、そのまま自然に受け止めてゆきたいと願うのは、我がままなのだろうか。

(長)

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤

斎藤晃道

村田洋一

石上俊教

佐山哲郎

編集顧問

大室了皓

浄土

六十三巻六月号 頒価六百元
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷——平成九年五月二十五日
発行——平成九年六月一日

編集人——宮林昭彦

印刷所——株式会社 平文社

写真植字——株式会社 シータイイー

〒一〇五 東京都港区芝公園四一七一四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話〇三(三五七八)六九四七
FAX〇三(三五七八)七〇三六

1997年 黒ラベル宣言 発売20周年

もっと、ピヤホール咽生へ。



新登場



ピヤホール咽ごし

サッポロ<生>黒ラベル

さらにおいしくなって新登場



ビールは、20歳になってから。あきかんはリサイクルへ



●ご協力のお願い。自動販売機による酒類の販売は午後11時から午前5時まで停止されます。
サッポロビール株式会社

Cima, Cima.



ここにニッサンの最高があります。新しいシーマ

シーマがあることで、あなたの生活にどんな感動と満足が生まれるだろうか。私たちは今、大きな自信を持って話せます。技術を注ぎ、性能に妥協せず、あらゆる状況で、「これぞシーマ」の乗り心地を楽しんでいただけると。あなたがクルマに理想として求めてきたことが、こんどのシーマに実現できたと。すみずみまで「ニッサンの最高」にふさわしい仕上り。風格と躍動感。ひとたび走り始めれば、そこにはもっと深い歓びが待っています。シーマ/シーマ/あなたの熱い賞賛の声が聞こえそうです。日本車初。全車、SRSサイドエアバッグ標準装備。運転席・助手席に装着。側面衝突時の胸部に加わる衝撃を緩和します。大きく進化した4.1ℓ V8エンジン搭載。シーマのために開発。優越感あふれるスペックが、滑らかで力強い加速を生みます。



Photo: シーマ 41ℓV ボディカラー ダークブルー・イッシュブラックフォートーン (P) (※4S9・特別塗装色) 本革シートはメーカーオプション ●全長4970×全幅1820×全高1445(mm) ●エンジンV8 4130cc TWINCAM ●最高出力270ps/5600rpm(ネット値) ●最大トルク38.4kgm/4000rpm ●運転席・助手席SRSサイドエアバッグ ●デュアルエアバッグ(運転席・助手席SRSエアバッグ) ●ABS(アンチロックブレーキシステム) ●V-TCS ●AVシステム(TV機能付) ●運転席オートドライビングポジションシート ※一部車種に搭載。シーマのお求めは、お近くのローレックス・スカイライン各販売会社へ。

スピードおさえて、いい運転。
シートベルトをしめましょう。

LIFE TOGETHER
 NISSAN

人間のやさしさをクルマに。